

TOTO

通信

2021年 新春号

Toward a Creative
Architectural
Scene

特集／藤塚光政の写真術を読む

Special
Feature
Fujitsuka Mitsumasa's
Photos



Special Feature

Fujitsuka
Mitsumasa's
Photos

建築家
室伏次郎さん、
自邸(北嶺町の家)
にて

「写真は説明ではない」と
断言する

写真家の藤塚光政さん。
建築を撮影するとき、
竣工までの幾多の営為の所産を
できるだけ説明しようとして、
あれもこれも入れたくなることもある。
しかし、それが本当に伝わる
写真になつていないとは限らない。
ひとりの人間が想いを込めて
シャッターを切つたとき、
「見主観的な写真が
生まれそうではあるが、
むしろ、そうした強い意志が
内包された写真にこそ、
情緒すらも感じさせる
伝達力があるのではないか。
建築の本質を射抜こうとする
藤塚さんに写真術を聞いた。
渾身の住宅写真とともに
紹介する。

写真5	「北嶺町の家」 設計/室伏次郎	22
写真6	「Plastic House」 設計/隈 研吾	24
写真7	「ダブルハウス」 設計/ウィリアム・メレル・ヴォーリズ	26
写真8	「森山邸」 設計/西沢立衛	28
写真9	「トレッドソン邸」 設計/アントニン・レーモンド	30
写真10	「低過庵」 設計/藤森照信	32

シリーズ		
旅のバスルーム112	文・スケッチ/浦 一也	34
現代住宅併走48	文/藤森照信「赤星鉄馬邸」 設計/アントニン・レーモンド	36
最新水まわり物語54	THE TOKYO TOILET	42
新商品開発物語	住宅用壁掛トイレFD(フローティング・デザイン)	48
TOTOギャラリー・間で 展覧会をします	中川エリカ展 JOY in Architecture	52
News File	TOTO News, Cera Trading News, Book	54

特集

藤塚光政の

写真術を 読む

ふじつか・みつまさ／1939年東京・芝に生まれる。61年東京写真短期大学（現・東京工芸大学）卒業。月刊「インテリア」を出版していた日本室内設計研究所に入社。63年菊竹清訓「出雲大社・庁の舎」の撮影で、写真家デビュー。65年フーリランスとなる。73年有限会社ZOOMを白鳥美雄と設立。87年Hilico有限会社設立。同年日本インテリアデザイナー協会賞を受賞。2007年川辺明伸を共同主宰者とする。18年2017年度毎日デザイン賞特別賞を受賞。

「北嶺町の家」の屋上。1971年竣工以来、変化しつづけてきた。足場のパイプで外部階段がつくられ、屋上も庭園になった。その変化を藤塚さんは撮影しつづけている（写真は2020年撮影）。

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 526
New Year 2021

インタビュー 僕の見方、
そして撮り方

藤塚光政 4

写真1 「焼津の住宅2」 設計／長谷川逸子 14

写真2 「反住器」 設計／毛網毅曠 16

写真3 「塔の家」 設計／東 孝光 18

写真4 「住吉の長屋」 設計／安藤忠雄 20

『TOTO通信』は
インターネットでも
ご覧いただけます。

🔍 <https://jp.toto.com/tototsushin>



特集
藤塚光政の
写真術を読む

インタビュー

僕の見方、そして撮り方

仕事で写真を撮りはじめてから、60年がたつ。「仕事還暦」を迎えたという藤塚さんの写真には、どこか編集者の視線が潜んでいる。何を撮るかというより、何を伝えるかが、撮影精神の中心にある藤塚さんに、その写真術を聞いた。

聞き手／伏見 唯、賛川 雪(まとめ) 写真／川辺明伸

藤塚光政さんの事務所Helicoにて。
背後の壁面のドローイングは、
彫刻家・板東優さんの「余白」。

Special Feature

Fujitsuka
Mitsumasa's
Photos

Interview

藤塚光政

Fujitsuka Mitsumasa

軍自六

動画をご覧
いただけます。



出発点は雑誌編集部

——今回は本誌でも長年お世話になっている、写真家の藤塚光政さんの特集します。

藤塚さんは雑誌『インテリア』（1960年創刊。70年に『ジャパンインテリア』と改名）から写真家としての活動をスタートされています。当時は、「インテリア」という言葉は登場したばかりで、まだ一般的にはなじみのないものだったと思います。が、こうした雑誌が刊行されたのは、どのような経緯からだったのでしょうか。

藤塚 僕がこの世界に入ったのは61年4月。当時は64年の東京オリンピックの開催が決まり、今でいうインバウンド需要が大いに見込まれていた時代だった。競技施設やホテルの建設が始まり、それに伴って、建築と家具デザインを統合させる室内空間のデザインが注目されはじめたんだよね。百貨店が家具設計部を拡充したり、建築家のアトリエにも、家具専門のデザイナーが在籍していた。たとえば、吉村順三さんの事務所には松村勝男さん、前川國男さんのところには水之江忠臣さん、坂倉準三さんのところには長大作さん。

こうした時代に、産経新聞にいた人が広告媒体

湖に作品を置くことで、
重力から解放された
表現にしたかったんです。



Fujitsuka Mitsumasa

として創刊したのが月刊『インテリア』でした。表紙を手がけたのは、亀倉雄策さん、田中一光さんらの日本デザインセンター。印刷所も光村印刷東京グラフィアなど一流の会社が揃えられた。B4変形判、定価550円。会社員の月給が1万2000円の時代だから、安いとはとてもいえない。まさに当時のインテリアデザインの気運の高まりを象徴するような、豪華な雑誌だったんです。

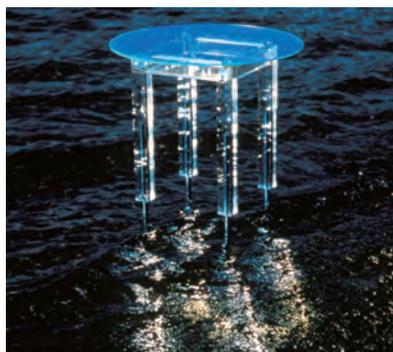
——そんな時代に登場し、藤塚さんが初期から撮りつづけたのが、倉俣史朗さんですね。藤塚さんの撮影した倉俣作品の写真はいずれも有名ですが、なかでも水辺に置かれた「ミス・ブランチ」(88)や「ブルーシャンパン」(89)のイメージは非常に印象的です。倉俣さんの作品を撮影するようになった経緯や、これらの写真の意図をお聞かせください。

藤塚 クラさん（倉俣さん）との出会いは63年。日建設計の林昌二さんが設計した「三愛ドリームセンター」が竣工した年です。当時、クラさんはその三愛のデザイン部に在籍し、アクリル製のショーケースをデザインしていたね。ある日、後の

「ブルーシャンパン」

1989年

倉俣史朗さんが1989年11月にギャラリー・イヴ・ガストゥ（パリ）で開催された個展のために制作したサイドテーブル。青色のアルミパイプの脚が全体を支え、4つのビーズの上にオパールガラスの天板がのっている。



写真／藤塚光政



『ジャパンインテリア』編集長・森山和彦さんからクラさんを紹介され、取材とは別に三愛の公式写真の撮影を依頼されたんだよ。そこからクラさんの仕事をたくさん撮影するようになった。僕が65年に『インテリア』を辞めてからも、その付き合いは続いたんです。

いくつかの作品は、湖に持って行って撮影した。湖は海と違って塩害もないし、波も少ないからね。なぜ水かといえば、それはクラさんが「重力から解放されたい」と言っていたから。それで、地球上で重力から解放されるのはやはり水中だろう、と。もちろん重力から逃れることはできないけれど、せめてイメージのなかでは、作品を重力から

空撮と小型カメラへのこだわり

——藤塚さんが『インテリア』を退社・独立された後に改題し『ジャパンインテリア』となった同誌は、編集者の川床樹鑑さんによる連載「建築・作品と方法の追跡」を開始します。文章は多木浩二さんと植田実さんが執筆し、写真を藤塚さんと先輩の作本邦治さんが担当されていますね。そこで、藤塚さんは、長谷川逸子や白澤宏規、渡辺豊和、そして親友・毛綱毅曠ら同世代の建築家たちと出会い、現代住宅を連続的に撮影されるようになります。この連載が、本格的に建築を撮影するようになっていくきっかけですね。

また、一般的な住宅写真の撮影にとどまらず、毎年空撮も続けています。たとえば、「中野本町の家」(76)と「シルバーハット」(84)を空撮されて

解放して浮かせたかった。クラさんの思想を、よりわかりやすく表現したかったんだよ。この「ブルーシャンパン」の写真はとくに気に入っています。まず「ブルーシャンパン」って名前がいいよね。想像力をかきたてる。このサイドテーブルを本栖湖に運んで、浅瀬に置いた瞬間、とんでもない光が作品に映り込んできた。まさに神がかった瞬間でした。

クラさん本人は、僕に「ああしてくれ、こう撮ってくれ、こういうつもりでつくったんだ」ということは絶対に言わなかった。だからいつも自分で考えて、自由に撮るようにしていたよ。本当にすべてがスマートな人でした。

いますが、どのような経緯があったのでしょうか。藤塚 これは『ジャパンインテリア』とは別の雑誌に頼まれた仕事だったんだよ。予算がまったくないのに、「シルバーハット」と「中野本町の家」の空撮をしてほしい、と依頼されました。困ったなあと思ったけど、しかたないから、長いあいだかけて自分で回収することにした。それで自腹で撮影のために飛んだんです。

すでに空撮は何回もやっていたからわかっていたけれど、それでもいざ上空から見ると、やはり小さいなあ、と思ったね。普通の公共建築に比べれば、住宅の規模なんてとんでもなく小さいでしょ。都内のような人口密集地域では、高度1000フィート(300m)までしか下りられない



写真/藤塚光政

「ミス・ブランチ」

1988年

倉俣史朗さんが1988年12月の東京デザイナーズウィークにおいて発表した肘掛椅子。アクリルに閉じ込められた造花の赤いバラが空中に浮かんでいるように見え、重力から解放された「浮遊」をテーマにした作品。

い。だからその日は300mmのレンズを準備して撮影に臨んだんだよ。結果はそれで大正解だった。おかげで「中野本町の家」「シルバーハット」それ自体の特徴的な平面の形や、ふたつの住宅と周辺の関係性を鮮明にとらえることができたと思います。

建築は、設計する際に模型をつくってスタディをするよね。上からの視点が良いのは、それと同じじゃないかな。俯瞰すれば大雑把でも全体のコンセプトがわかるし、何よりも、街との関係性が明確になる。頼まれればなんでも空撮するわけじゃなくて、自分が空撮のカットが必要だと判断したものを撮ってきたんです。

ただ、空撮をずっと続けている一番の理由は、やっぱり自分が飛びたいからだね(笑)。子どもの頃からずっとパイロットに憧れていたけど、僕は足が悪かったから……。それで写真家になったんです。空撮といえ、今はドローンがあるし、確かにドローンじゃないと撮影できない場合もあると思うけど、僕はやっぱり自分が飛びたい。

——小型カメラで建築を撮影することも、藤塚さんの特徴的な手法だと思います。過去のインタビューで、「建築を小型カメラで撮影しはじめたのが、68年、竹山実さんや仙田満さんの取材からだった」

俯瞰すれば
建築と街との関係性が
明確になります。



Fujitsuka Mitsumasa

と話されていて、とても早くから小型を使われていたんだな、と思いました。藤塚さんが考える大判カメラと小型カメラでの撮影の違いはどのようなところですか。また、なぜ小型で撮影をするようになったのでしょうか。

藤塚 小型カメラといえば、パイロットをあきらめて東京写真短期大学(現・東京工芸大学)に入学したとき、兄が買ってくれたのがキヤノンのVL(Canon VL)でした。当時会社員の初任給が1万円程度だったのに、5万5000円もする代物。

これが初めての自分のカメラ。これで建築はあまり撮っていないけれど、間違いなく小型カメラが、僕の原点なんだよ。

一般的に、建築を撮影するときは「シノゴ」(4×5)と呼ばれる「アオリ」が利く大判カメラが採用されています。

した。シノゴは4×5インチの大判フィルムやそれが使えるカメラのことで、建築のテクスチャーがプリントにはつきり再現できるといふ利点がある。アオリというのは、建築の垂直性を維持するために、レンズとフィルムの中心をずらす機能のこと。垂直性と材質感という建築の特性がはっきりするから、シノゴとアオリが建築写真の定番になっていったんです。でもこういう強い機能は、時として建築の本来の形をゆがめて写してしまう



写真/藤塚光政

「中野本町の家」「シルバーハット」

1976年/1984年

伊東豊雄さんが設計した姉家族のための住宅「中野本町の家」(現存していない)。中庭を開んだU字型の外形。その隣地(写真左)に伊東さんが設計したヴォールト屋根の自邸「シルバーハット」が立っている。



こともあるんじゃないかな。

一方、小型カメラがよいのは、機動性が高いし、身体に一番近いところで撮れることだと思う。フリンダーを覗く目と、レンズのピントを合わせる手、フレーミングを決める脳、そしてこれらが全部決まった一瞬をとらえるべくシャッターを切る指が、全部近いところにある。瞬時に対応でき

ありのままの暮らしを撮る「意地の都市住宅」

——82年に中原洋さんとスタートした連載「意地の都市住宅」(雑誌『BOX』、ダイヤモンド社)では、その小型カメラを使用して建築を撮影してきた経験が、非常に生きているように思います。

藤塚 これは僕にとつて、すごく大事な連載でした。まさにこの企画が、僕の小型カメラによる住宅撮影を定番化したのですから。

中原さんとの出会いは、雑誌『流行通信』の撮影のときです。室伏次郎さんの傑作「大和町の家」(74)を撮影しに行くと、その建主こそが中原さんでした。後日、掲載誌を見た中原さんが「僕の家はこんなふうに見えるの?」って喜んでくれました。それで「意地の都市住宅」を始めるときに、写真を撮ってほしい、と僕に声をかけてくれたんです。タイトルは、もちろん植田実さんが編集長を務めた月刊『都市住宅』(鹿島出版会)にあやかっています。

連載を始めるにあたって、中原さんといくつか決まりごとをつくりました。掲載するのは新築ではなく、4〜5年たって、住んでいる人の好みや

るのがいいんだよ。だから小型を使うことが多いなりました。短気だしね。

もちろん、場合によっては小型ではなくシノゴを使うこともあるし、どちらがよいという問題ではなく、何をどう撮りたいのか、そこが一番大事だと思っています。

生活のスタイル、あるいは何か体臭のようなものが付きはじめた住宅にしよう、と。だから撮影のために片付けたりしない。それに天候に関係なく建築は存在するのだから、どんな天気でも撮影をすることにしました。住む人が写ることだって問題ない。そして撮影は2時間以内ですませること。住んでいる人の負担になるし、なるべく自然な姿をとらえるためにも、撮影は早く終わらせたいからね。とにかく、住宅とそこでの暮らしを、ありのままに伝える連載にしよう、ということになったわけです。それにはまさに、僕の小型カメラによる建築撮影がうってつけだったんだよ。

この連載を通して感じたのは、70年代は、本当に刺激的な住宅がたくさん生まれた時代だったということです。建築家はもちろんだけど、その家に暮らす建主たちも意欲的だった。ただ快適さを求めるんじゃないくて、誰も思いつかないような空間や新しい価値観を、建築家と建主が一緒に追求し実践したんだと思います。石山修武の「幻庵」(75)や安藤忠雄の「住吉の長屋」(76)は、まさに

そういう住宅だよね。

——建築写真によくある、家具やモノが何も置かれず、人の気配のない新築住宅の竣工写真を、藤塚さんは「ドンガラ写真」と言いますよね。「意地の都市住宅」が大切にされた、ありのままの暮らしを撮影する写真とは対極的なものだったと思います。しかし、そうしたドンガラ写真のほうが、建築写真においては長年主流でした。

人と空間をとともに写す「住宅遺産」

——連載「住宅遺産 名作住宅の継承」雑誌『家庭画報』、世界文化社）では、写真に必ず住人を入れていきます。そもそも企画のテーマが、名作住宅の「継承」です。現在の住み手へバトタッチされ、

住み継がれていることを表現するものですから、毎回必ず人と空間を同時に撮影してました。人と建築を同時に撮るのはいかがでしたか。

藤塚 建築空間に人がいる写真を初めて発表したのは、堀口捨己さんじゃないかな。記憶があいまいだけど、茶室か何かに、和服の女性を入れて撮った写真だったような気がする。でも、狭い室内

写真家として、ジャーナリストとして

——最後に、藤塚さんの写真家以外の側面にも焦点を当てておきたいと思います。藤塚さんは、写真家でありながら、最初は編集者でもありました。そのことが後の活動の特徴づけてきたのだと思います。たとえば、藤森照信さんや隈研吾さんの作

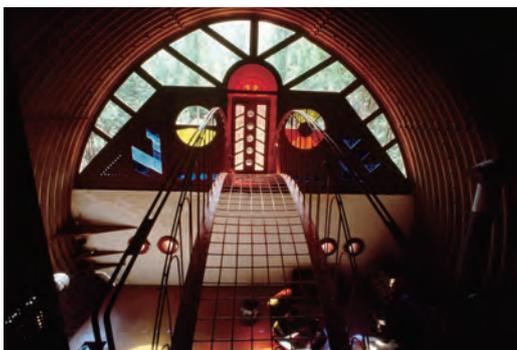
藤塚 どうしてこれが建築写真の主流になったのかはわからないんだけど、おそらく、建築家の考えが一番ストリートに出ると思っただらうね。

住み手の個性、それこそにおいみたいなものを見せないことで、客観性を担保しようとしたんだと思います。でも、そもそも写真に客観性なんてあるわけがないんだよ。写真家がよいと思ったところを選んで撮影してるんだから。

では空間が人物でいっぱいになってしまっていた。建築と人物をうまくとらえることは、建築写真にとって難しい命題のひとつです。

ただ、だからといって、設計事務所の所員をあえて立たせたりするのは、あまりよい方法とはいえないよね。確かにスケールはわかるかもしれないけれど、やっぱりあえて人を入れるなら、ストーリーがないとダメだと思う。匿名の誰かではなく、その空間と人物の関係を写し出すことで、それがどんな建築なのかを伝えるべきなんです。

品を長年撮りつづけるきっかけとなった『建築リフル』シリーズ（TOTO出版）は、藤塚さん自らが企画・編集・撮影をされてきました。現在連載中の「日本の木造遺産」(雑誌『家庭画報』、世界文化社)も、藤塚さんの企画・撮影です。写真家



写真／藤塚光政

「幻庵」

1975年

石山修武さんが設計した茶室「幻庵」。竹や土壁などの一般的な茶室の素材ではなく、土木工事用のコルゲートシートの中に、色ガラスの丸窓、鉄の太鼓橋などを配した、工業用部品を集めた現代の茶室。



がここまで本・雑誌の企画や編集を手がけるのは、とても稀有なことではないでしょうか。こうした活動から、藤塚さんの強いジャーナリズム精神を感じます。

藤塚 僕はもともとブックメディアが好きなんだよね。生写真だけじゃダメで、やっぱり写真はレイアウトされて印刷物になって、初めて完成品になるのだという思いが強い。『建築リフル』のシリーズも、そういう思いがあってつくったものです。

伝統木造建築を撮るようになったのは、毛綱毅曠の連載「神聖空間縁起」(雑誌『室内』、工作社)で撮影を頼まれたのがきっかけです。その後、各地に行っは古建築を観察するようになり、何百年も前の人々が何を考えてつくったのか、それを想像しながら古建築を見るのはとてもおもしろかった。でも一方で、長年多くの写真家が古建築を撮っていますが、それに対してはあまりおもしろいと思えなかったんだよね。建築物の重みや凄さに圧倒されて、写真のほうがかひれ伏しているというか。空間のおもしろさや思想みたいなのを、

どんなかたちで世に出すかを見据えて撮る癖がついています。



Fujitsuka Mitsumasa

写真が伝えきれていないと思った。それでいつか僕が撮ってやるう、と長年企画を練っていたわけです。

どうして長年こんな活動をしているんだろう、と考えると、やはり僕のスタートが雑誌の編集部だったことが大きいのかな。たとえば、4ページの特集を担当すれば、そこでは僕が編集長になったつもりでやっていました。構成を考えながら撮影するし、自分で写真を組んでレイアウトを決める。スタッフが少なかつたから、あらゆることが

自分でできたんだよね。それに『インテリア』には、建築専門の部員もいなかった。歴代の編集長も、舞台美術家や写真家でした。そういう環境も手伝って、自分で建築や空間を読み込む力をつけることができたし、撮影に終始せず、どんなかたちで世に出すのかまでを見据えて撮る癖がついたんだと思います。仕事をスタートしてから60年がたつから、まさに「仕事還暦」とでも言おうか。これからもずっと変わらず、そうやって撮りつづけていきたいですね。



TOYO
super GRAPHIC

目と手と脳、
そして
シャッターを切る
指の全部が
近いところにあるのが
小型カメラ。

RICH-RAY
BABY RICH-RAY



Nikon
F

ZEISS
SUPER-ANGULON 72mm f5.6

藤塚光政

Canon
VL

藤塚さんが愛用してきた撮影機材。BABY RICH-RAYは、子どもの頃に友人がもっていた子ども用のカメラ。友人に借り、幼心に撮影を楽しんだという。大人になってから、同じ機種を購入した。Canon VLは、東京写真短期大学に入学した際に兄に買ってもらったもの。脇をしめてスローシャッターを切る練習をしていたと言う。TOYO super GRAPHICは手持ちの大判カメラ。Nikon Fは、建築撮影用に購入した最初のカメラ。「どのレンズにも対応し、100%の視野で撮影できる」ため、愛用していたと言う。

写真／遠藤秀一

Photograph no.1

写真

01 >>

作品名

「焼津の住宅2」

設計

長谷川逸子

竣工年

1977年



アイコニックな 銀と白の 三角形を 画面に収めたかった

さまざまな建築作品を撮影した「建築・作品と方法の追跡」(雑誌『ジャンインテリア』の連載)のなかでも、この「焼津の住宅2」が印象深かったという。この建築を初めて見たときのことを、藤塚は「屋根だけというか、堅穴式住居のような。まるで立面が埋まったような姿にとっても驚いた。三角形は造形として強いしアイコニックだから。立面の銀と白のペイントも、青空に映えていた」と振り返る。

軽い高揚を感じながらカメラを構えたが、外観全体が入らない。当時一番使用していた20mmのレンズだってそこそこ広角だが、それでも全体を収められなかった。結局その日は、着いて10分もたたないうちに退散。東京に戻ってすぐニッコール15mmレンズを買いに行った。定価は18万5,000円(当時)。「とても高かったけれど今必要なだし、レンズはその後でも使うことができるから。そうじゃないと、レンズやカメラなんて買えないよ。この一回で半分元をとった、と思えなきゃ、踏ん切りがつかない」。

そして翌日、買ったばかりのレンズを携え、再び焼津へ赴いた。しかしそれでも全景は収められない。塀に脚立を立てかけて上がり、やっと全景が入るポイントを確認した。だが、今度は手前にある桜の枝が邪魔をする。撮影は時間との勝負、迷っている暇はない。ここまでして戻ったのに……そう思った瞬間、躊躇なく枝を折って撮影したという。「無事に撮れた後、川床(編集者)に枝を渡して謝りに行ってもらったよ。今思えばひどい話だな」。 文/賛川雪(14~33ページ)



←小屋裏の室4。
三角形の空間とそれを
支える架構がわかる。

↓東側外観。
東面の壁は一面が銀色。
三角形状の印象を強調している。



Fujitsuka Mitsumasa + Hasegawa Tsuko



西側外観。壁は一面が白色。



Photograph no.2

写真

02 >>

作品名

「反住器」

設計

毛綱毅曠

竣工年

1972年



中央の部屋。住人の毛網毅曠の母とともに。

親友の代表作の なかから 親友を育んだ 釧路の街を望む

生涯の親友・毛網毅曠と藤塚との出会いは1977年。「72年に『反住器』ができたことは知っていたけれど、東京で毛網に会ったことはなかった。建築からして、変わった野郎だな、と思っていたよ。その後、77年に別の撮影があって釧路に行き、そのときに『反住器』も見に行ったんだ。出会ったその日に、毛網とは親友になった」。

毛網が母親のために設計した「反住器」は、立方体の建物と、中に設えられた立方体の部屋・家具をもって三重の入れ子になっている。「三重の立方体構造」といえばとても簡単に聞こえる。しかし正直なところ、その中を住み手がどんなふうに行き来し、暮らすのか。平面図を見ても不思議で、その計画意図を想像するのは難しい。

だから、一般的な建築写真はそれを説明しようと建築の軀体を撮ろうとするだろう。ただ、「僕が撮りたかったのは、外箱と中箱のあいだにあって外の街とつながった、目に見えない空間や空気なんだよ。毛網は『人は間(すきま)に住む』と言っていた」。

「反住器」は、毛網毅曠そのものだ。厳しい自然環境であり、冬は極寒となる釧路の街で、母親の暮らしをあたたく包み守るためのやさしい器であり、同時に、孤高の天才建築家・毛網の精神性を強くまっすぐに体現する結晶でもあるのだから。それを写すとき、藤塚は彼と彼を育んだこの地に思いを馳せたのではないか。



Fujitsuka Mitsunasa + Mozuna Kiko



←正面外観。
白いキューブの建築は、
冬は白い雪景色のなかにある。

↑箱を入れ子状に
配置した室内。窓の外には
雪が降る釧路の街並み。

玄関まわり。荒々しい
コンクリートの壁面に
植物の影が落ちる。

地層のような 階段の隙間から 見える住み手と その友人たち

「意地の都市住宅」(雑誌『BOX』の連載)のコンセプトは、「意地を張ってでも都市に住む意志をもった住宅を紹介すること」。「塔の家」は、この連載の第1回で紹介された住宅だ。坂倉準三建築研究所から独立し、都内に自邸を建てることにした東孝光には、郊外に居を構えるという選択肢はいっさいなかったようだ。都心で得られたわずか6坪ほどの敷地に、書庫、リビング、寝室に子ども室、水まわりに加えて駐車スペースをも詰め込んだ、地下1階・地上5階の狭小高層住宅を自ら設計し、家族3人で居住した。まさに元祖・「意地」の都市住宅だ。「とにかくめちゃくちゃ狭いから、とても三脚なんて構えられなくて。まさにこれこそ、小型カメラじゃないと撮れない住宅だったんだよ」と、藤塚はうれしそうに話す。

確かに「塔の家」は、平面だけでとらえれば狭いかもしれない。しかし、住宅の内部には扉や仕切りがいっさいないので、視線をさえぎるものがない。外からの光も、空間の奥のほうにまで差し込んでいる。また、6層のフロアを階段がつないでいて、縦方向にすっと抜けるような気持ちよさがあるのだろう。階段と吹抜けを通して、上下に空気が流れていくようだ。写真には、ごつごつとした打放しコンクリートの素材感や、空間のスケールもしっかりおさえられている。しかしそれ以上に、藤塚が、まるで地層のような階段の合間を通して切り取ったのは、都市のなかで空間の心地よさを楽しむ住み手やその友人たちの姿だった。



Photograph no.3

写真

03 >>

作品名

「塔の家」

設計

東孝光

竣工年

1966年



外観。狭小地となっても
都市に住むため、
塔のような姿になった。



Fujitsuka Mitsumasa + Azuma Takamitsu

上に3階の踊り場。
下に2階の居間と
そこに居る人々。



Photograph no.4

↑1階の中庭。
屋根はないが、そこには
家具が置かれている。

写真

04 >>

作品名

「住吉の長屋」

設計

安藤忠雄

竣工年

1976年



細いスリットのような正面入口。

暮らしの ありのままを伝えるため 中庭に置かれた 家具もそのままに

こちらの「住吉の長屋」の写真は、「意地の都市住宅」(雑誌『BOX』の連載)のために撮影されたものだ。周知のとおり、この住宅の大きな特徴は、三分割したヴォリュームの中央に設けられた、屋根のない中庭の存在である。発表当時は、多くの建築批評において、住宅内部にしながら、外部空間を通して部屋から部屋へ「移動すること」の是非ばかりが取り沙汰されたようだ。しかし、空間自体はいったいどのようなものなのだろう。そこに立つと、どんな心地になるのだろう。

暮らしのありのままを写した藤塚の写真からは、ただただこの空間の気持ちよさが伝わってくる。不便さや不快感はまったく感じられない。むしろ、植栽やテーブル、椅子が置かれ、住み手がこの空間を積極的に楽しんでいる様子が写し出されている。何もない「ドンガラ写真」からは、こうした暮らしぶりを想像することはなかなか難しいだろう。玄関以外の開口がなく、一見非常に閉鎖的に思われる住宅の内部には、じつはこんな開放的な暮らしが広がっていた。

しかし藤塚いわく、「でも、今見るとこの写真はダメだな。この中庭の上に空が広がっている、あの開放感や気持ちよさがまだまだ出ていないんだよ。もし、今また『住吉の長屋』を撮影できるとしたら、入った瞬間にすぐ上を撮るかな」。

Fujitsuka Mitsunasa + Ando Tadao



←中庭俯瞰。
部屋から部屋へ移動する
動線は中庭。



Photograph no.5

写真

05 >>

作品名

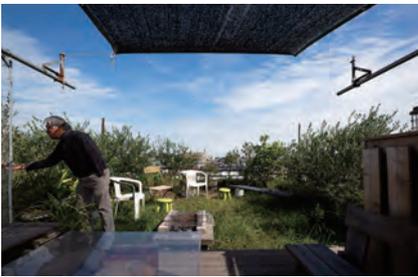
「北嶺町の家」

設計

室伏次郎

竣工年

1971年



屋上庭園(下写真とともに2020年撮影)。

コンクリートに 守られた都市住宅だが、 屋上は庭園となり 開放的に変化

「あんな住宅はないよ。『北嶺町の家』は、まさに住宅のマスターピースだ」。室伏次郎の自邸「北嶺町の家」は、竣工から50年がたつ今もお撮りつづけている住宅作品だと言う。最初は二世帯住宅だったが、その後は全フロアを室伏家が使用したり、時には一部を賃貸にしたり、子どもが巣立って独立したり、あるいは結婚して戻ってきたり。住み手の変化に伴って、強固な骨格はそのままに、設えをその都度自由に変化させながら、住みつけられている。

撮りつづけるのは、変化を記録するためなのか。「北嶺町の家」は、柔軟に空間を変化させてきた。都市住宅が有すべき、こうした可変性は、藤塚に撮りつづけたいと思わせるのに十分な価値があるのだろう。

加えて藤塚は、室伏のなかの不変性をここに見出しているのだろう。「北嶺町の家」の特徴は、空間の明暗にある。改装を経ても、生活空間はずっと壁できちんと仕切れ守られている。その結果、居室が暗いとしても、壁を取り払って室内を無理に明るくしたり、開放的であろうとするような改修は施されない。しかし、屋上は庭となって、きわめて開放的に。

都市に住まうとは、単に利便性に容易にあやかることではない。住み手は日々都市に向き合い、努力や苦勞をしながら暮らしている。都市住宅とは、いつも住み手を守るものでなければならないのだ。藤塚は、室伏のなかのブレることのないこの試みに並走しつづけているのではないか。

Fujitsuka Mitsumasa + Murofushi Jiro



←北西側から見た外観。
コンクリートの躯体から階段や
ガラスのアルコーブが張り出している。

↑3階のリビング・ダイニング。
コンクリートの壁面が、レイヤーを
なしている(1982年に撮影)。

昼夜で表情を変える プラスチックの光壁を 撮りたくて、 内と外の両方で構えた

隈研吾は、藤塚が長年にわたって作品を撮影している建築家のひとり。藤塚責任編集の『建築リフル』シリーズでは、隈に文章を依頼した。それが、今も続く付き合いが深まるきっかけだった。かねてから、隈の書く文章が好きだったという。

多くの隈作品を撮影しているが、そのなかで選んだのが「Plastic House」。2枚のFRP（繊維強化プラスチック）で光を透過する断熱材を挟んだ外壁をつくり、階段やその手すり、バルコニーにもFRPが採用されている。文字通り、プラスチックでできた住宅だ。

「昔から、プラスチックはどちらかといえば肯定的な存在ではなかったし、最近はさらに見る目が厳しい。建築にとっても不可欠な素材であることは間違いないけれど、誰もがそんなに美しいものだとは思っていないよね。でも、隈さんの手にかかれば、プラスチックが本当に美しいもののように感じられたよ。FRP特有のあの緑がかった色味も、なんだか植物みたいにさえ思える」

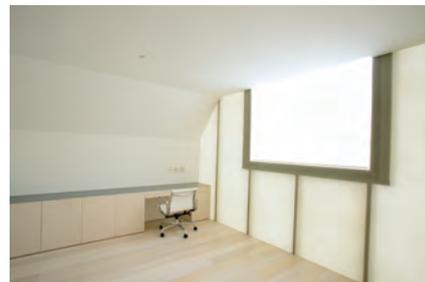
「一日を通して撮影したんだけど、昼間は外の明るさを取り込んでほんやりと明るいのに、それが夜は普通の家並が続くシルエットのなかでやわらかに灯っていて。まるで、そこだけ昼夜が逆転するようだった。プラスチックにもかかわらず、まるで障子を通したようなやさしい光だった。それを撮りたくて、昼は内側から、夜は外側から撮影した。見たことのない世界を示すKumagicだよ」

Fujitsuka Mitsumasa + Kuma Kengo



室内の光が
壁を通して外にもれ
やわらかい光が街に灯っている。

外光によって
室内の壁全体が
ほんやりと光っている。





Photograph no.6

写真

06 >>

作品名

「Plastic House」

設計

隈 研吾

竣工年

2002年

クリスチャンが 設計した家を クリスチャンが住み継いだ 姿を写す

日本で住宅を継承することは、非常に難題だ。それでも継承が実現するのは、さまざまな人がその住宅に対して注いだ愛情や努力があってこそのこと。住み手は住宅だけではなく、それを設計した建築家やかつての持ち主、保存や新たな持ち主探しに従事・奔走した人々の想いも受け継ぐこととなる。

こうした見えないストーリーをも、藤塚は写真に写し出しているように思われる。しかし「事前に執筆者の原稿を読んだり、撮影のポイントを打ち合わせて決めておくようなことは絶対にしない」と言う。文脈を自ら感じ取り、間取りの核を見出す力が抜きん出ているのだ。

キリスト教の伝道のために来日したヴォーリズが設計した「ダブルハウス」。現在は、奇しくもヴォーリズと同じクリスチャンの夫妻に、“神からの預かりものとしての住まい”として受け継がれている。

連載「住宅遺産 名作住宅の継承」(雑誌『家庭画報』)における写真の唯一の決めごとは、「継承者と空間の写真」。その撮影のために、藤塚が夫妻を座らせたのは、来賓を迎えるためのスペースとして設えられた部屋だった。住み手は、やわらかな陰影のなかで、とてもやさしく穏やかな表情を浮かべている。そんなふたりを、藤塚は隣の部屋からあえて扉越しに写し取った。まるで住宅が開かれ、新しい住み手であるふたりを「祝福」しているように見えないだろうか。

Fujitsuka Mitsumasa + William Merrell Vories



食堂から、部屋を区切る
折れ戸越しに居間。
そこに住人夫妻が座っている。

南側の庭から見た外観。
洋風の生活が浸透しはじめた
大正時代らしい洋館。





Photograph no.7

写真

07 >>

作品名

「ダブルハウス」

設計

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ

竣工年

1921年



空から撮ると アイレベルではわからない ものを一枚に 収めることができる

「僕の経験則だけど、11月3日は不思議と毎年晴れるんだよ。だから、毎年空撮をすることになっているの。この年は、ちょうどその前から『森山邸』の撮影依頼が来ていたから、これは絶対に空撮がいいだろうな、ってピンときた。それで調布の飛行場から飛んで、2、3カット撮影したんだ」

これは、雑誌『BRUTUS』（マガジハウス）のために撮影された一枚だ。「森山邸」の写真といえば、ほとんどの人は、白い箱型の建物群が林立するのを、路上からアイレベルでとらえた写真を思い出すことだろう。しかし、藤塚はあえて空撮を選択した。

上空からの俯瞰によって、内部の関係性がはっきりわかる。アイレベルでは一度にとらえられない、10個のホワイトキューブそれぞれのヴォリューム感や、それらが敷地内につくり出す路地が、この一枚にすべて収められている。

また同一枚の写真で、「森山邸」と街とのつながりも明らかにしている。敷地周辺は、縦横グリッド状に道が走り、各住宅はバラバラながらも秩序だって並ぶ。建物群の配置や路地は、そうした周辺環境と接続し、街の一部として溶け込むよう計画されていたのだ。

こちらの写真も、インタビュー本文（8ページ）の「シルバーハット」「中野本町の家」の写真と並ぶ、藤塚の住宅空撮という手法が非常に生きた例だろう。

Fujisuka Mitsumasa + Nishizawa Ryue

空撮した「森山邸」。
周囲の街並みとヴォリュームや
路地が連続している。

俯瞰した夕景。
部屋が見え、各ヴォリュームの
関係性がわかる。





Photograph no.8

写真

08 >>

作品名

「森山邸」

設計

西沢立衛

竣工年

2005年

あかりの灯る 街並みと、 暗闇のなかの ピラミッド

もうひとり、藤塚が撮影しつづける建築家といえば、藤森照信だ。ふたりの初仕事も、『建築リフル』。そのシリーズ第1作で藤塚が取り上げたのが、藤森のデビュー作「神長官守矢史料館」(1991)だった。その後、「建築探偵藤森先生と行く美術館」「藤森照信の『日本のモダン建築』20世紀の名作住宅」(ともに雑誌『モダンリビング』)や「日本の木造遺産」(雑誌『家庭画報』)など、藤森が文章、藤塚が写真を担当した連載は、いずれも好評を博している。

藤塚が、継続して藤森作品を撮影するようになったのは、『モダンリビング』の連載「藤森照信の住居の原点」のため。藤森が「人類の住まいにとって必要な要素とは何か」について、自作を通して語っていくという内容だった。

これは「高過庵」(2004)から撮影した「低過庵」。高さ約10mの「高過庵」に対し、こちらは地下に埋まった竪穴式。形は四角錐で、屋根は人力でスライドさせて開くことができるようになっている。「日が落ちるなかでぼんやりと浮かび上がる様子は、まるであの世みたいだったな。中に入ってみると、声が反響して。なんだかお墓に入ったみたいな気分だったよ」と、撮影時の感想を話してくれた。この一枚に表現されているのは、藤塚の言葉のとおり、現世とあの世だろうか。あかりの灯る茅野の街並みとは対照的に、暗闇のなかにピラミッド(=墓)が本当に浮かんでいるように写し出された。

Fujitsuka Mitsumasa + Fujimori Terumobu

↑「高過庵」から「低過庵」を見下ろす。屋根がスライドし、中には藤森照信さんが座っている。

→「低過庵」の内部。スライドした屋根の隙間から「高過庵」が見える。





Photograph no.10

写真

10 >>

作品名

「低過庵」

設計

藤森照信

竣工年

2017年

パリの典型的なプティ・ホテル

パリはリヴォリ通りからマレ地区に入
つてすぐのいわゆるプティ・ホテル。プ
ティック・ホテルともいわれている。

小さなロビーでレセプションストラ
きおじさんがひとり、たくさんの書類を
積み上げたデスクの前でこやかに出迎
えてくれた。いかにもフロントというカ
ウンターより親しみがもてる。

ロビーの壁は花模様クロスの緞子張
り(*1)。たくさんのアンティーク家具
や額絵に囲まれたラブリーなインテリア。
観光に、買い物に、食事にとでも便利
な立地。ポンビドゥー・センターやピカ
ソ美術館にも近い。

ゲストルームは小さいが、妙に落ち着
く。ここに何日も滞在したが飽きない。
古材を使った天井の木の梁が太い。鳥瞰
スケッチにしてみる。

ライティング・デスクはジャンピング
して化粧台になる。その奥にある化粧鏡
に付いたキャンドル型の照明器具には感心する。炎の部分
はガラスでできているのだが、それが揺れ動く。薄いメタ
ルがたぶん照明の熱でスイングするだけなのだろうが、そ
のゆらめきが自然。よくできている。これは安全。
白と青のバスルームも決して広いとはいえないが、過不
足がなく、清潔。

外で夕食をいただき、ホテルに帰ってきて驚いた。
なんとホテルが火事！ 訓練ではない。はしご車がはし
ごを伸ばし、ポンベを背負った消防士がたたくさん走りまわ
っているではないか。ホテルの従業員が暖炉の煙突の中に
あった紙を取り忘れて火をつけてしまったとか。「ぼや」で
すみ、水浸しも免れたが、しばらく焦げ臭さは消えない。
パリは古い建造物に神経を尖らせていることがよくわかっ



外観。
青いエントランス。

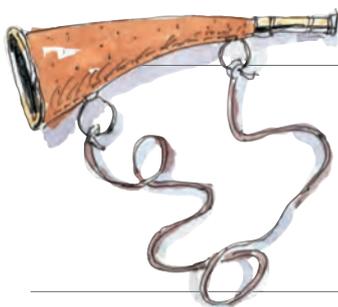
た。
何泊もしたのに、ホテルは申しわけな
いとその日1泊分の宿泊費は受け取らな
かった。

バステイユで年に2回催される骨董
市アンティーク・ブロカンテに行く。
数百といわれる店が河の兩岸に並び、
それはそれは広くて、一店ずつ見ていく
と一日かかる。あまり価値のないような
古道具もあるが、長い時間経過に重い価
値を見出す人々がそれだけたくさんいる
ということに感心する。

クリニャンクール(*2)やサン・ト
ウアンの常設のフリーマーケットや家具
屋も見えてまわる。再訪なのが、またも
膨大な店の数に圧倒された。安い食器か
ら版画、高価な照明器具、日本の仏壇ま
である。ひやかして歩くだけでこれも一
日はかかるだろう。おもしろいレストラ
ンもあって楽しめる。土、日、月曜だけ
オープンされ、家庭向きの古道具を買い求める家族連れで
賑わう。アンティークを眺めるものではなく、とにかく使
うものとして探しているのだ。だからリペア(修理)シヨ
ップが成り立つ。

ディテリオレーション(deterioration)という概念があ
る。古びる、悪化、劣化、低下するというような意味。火
事騒ぎとアンティークでこれが気になってきた。

*1 緞子(どんす)張り…壁に布地を張る工法。クッションになる材
料を入れ、周囲だけを留めるので布団を張ったようにふわふわとする。
*2 クリニャンクール(Clinique)…パリ市中心から地下鉄で約
30分。約3000軒の店舗がひしめき合い、パリで最大の蚤の市といわ
れる。生活雑貨から家具、古着、美術品、アクセサリー、なんでも売っ
ている。



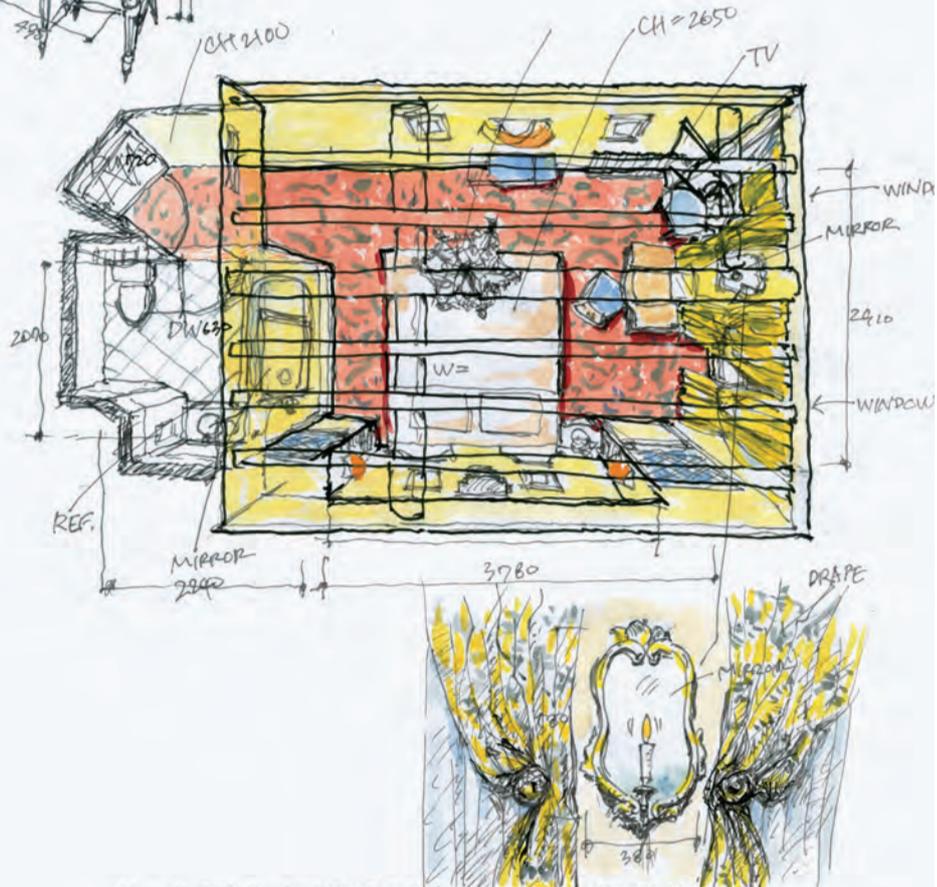
アンティークの
狩猟用ホーン。

うら・かずや/建築
家・インテリアデザ
イナー。1947年
北海道生まれ。70年
東京藝術大学美術学
部工芸科卒業。72年
同大学大学院修士課
程修了。同年日建設
計入社。99/201
2年日建スペースス
デザイン代表取締役。
現在、浦一也デザイ
ン研究室主宰。著書
に「旅はゲストルー
ム」(東京書籍・光文
社)、「測って描く旅
」(彰国社)、「旅はゲス
トルームII」(光文社)
がある。

Hôtel



Caron de Beaumarchais



12, rue Vieille-du-Temple • 75004 Paris • Tel. : 01 42 72 34 12 • Fax : 01 42 72 34 63
E.mail : hotel@carondebeaumarchais.com - Internet : www.carondebeaumarchais.com
RC Paris B 382273654 - TVA Intracommunautaire : FR 62382273654

ラブリーなインテリア。
バスルームは
コンパクトで清潔。

Hôtel Caron de Beaumarchais

Add / 12, rue Vieille-du-Temple-75004 Paris, France

Tel / +01 42 72 34 12

Fax / +01 42 72 34 63

Email / hotel@carondebeaumarchais.com

URL / www.carondebeaumarchais.com



赤星鉄馬邸 設計／アントニン・レーモンド

放打面 すちを

鉄筋コンクリートの
回り階段は、昔は
製図と施工の両方
が、今も施工が難
しい。

1

現代
住宅
併走

第四十八回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

写真／普後 均

(アントニン・レーモンドのポートレイトを除く)

世

界と日本のモダニズム建築には、私見によるとパウハウス派とコルビュジェ派のふたつがあり、まず前者が先行して世界を席巻し、続いて後者が分離独立し、ル・コルビュジェと縁の深い国でのみ主流となる。後者の最大の国がわが国で、コルビュジェの祖国フランスがコルビュジェを認めたのは日本よりずっと遅れ、戦後になる。

日本のコルビュジェ派の始点となる東京のレーモンドとパリのコルビュジェのあいだには、

1930年のコルビュジェの未完に終わった「エラズリス邸案」をレーモンドがパクって自分の別荘として実現するという確執があった。レーモンドは確かに強い影響を受けているが、一方、コルビュジェもレーモンドをパクった、と私はにらんでいる。ふたりは、20世紀前半のモダニズム成立期において、コンクリート表現を巡ってパリと東京で先陣争いをしてきたとみるのが歴史的には正しい。

先陣争いの日本側の舞台となつたのは「レーモンド自邸」(24)、

現代住宅

Antonin Raymond × Fujimori Terunobu

これが正面、左手が回り階段。

2



「川崎守之助邸」(34)、(赤星鉄馬邸) (34) の3作で、幸い私は3作とも見ているが、今は(赤星鉄馬邸)が残るのみ。

コルビュジェがレーモンドに学んだのは、打放しコンクリートの表現だった。コンクリートをどう表現するかは20世紀建築の大きなテーマのひとつで、モルタル塗り、^ハ研り、^ハ打放し、^ハ研磨の4つのうちの中核をなす打放しを巡って先陣争いが起こっていた。

まずオーギュスト・ペレが23年「ル・ランシーの教会」で先駆け、すぐレーモンドが24年の「レーモンド自邸」で続き、その8年後、コルビュジェが32年「スイス学生会館」で試みている。レーモンドは世界で2番目であることに強い自負をもち、31年フランスを代表する文化人ポール・クロードルの序文を得てフランス語で『レイモンドの家』を刊行しているが、この出版は、パリのペレとその弟子コルビュジェに向けてのメッセージだったにちがいない。

事の順が錯綜するけれど、このメッセージを受けてコルビュジェはスイス学生会館で初めて打放しを試み、一方レーモンドはエラズリス邸案を木造に置き換え、さらに自分の工夫を加えて「軽井沢夏の家」(33)を手がけ、コルビュジェからバクリと批判された。

ふたりの競争を、ここでは触

左手玄関から入り、右手の馬蹄形の回り階段で2階上がる。

3



れない項目も加えてフィギュアスケート風に採点するなら、コルビュジェ優位は、①ピロティ、②連続窓、③屋上庭園の3項目。レーモンド優位は、①打放し、②斜路、③充実したディテールの3項目。

確かにピロティ、連続窓は形全体を決めるから世界的にはコルビュジェ優勢にちがいないが、同じときに同じ会場で滑ったレーモンドは同点意識をもっていった可能性がある。



回り階段を外から
見上げる。

4



回り階段を下から
見上げる。

5

〈赤星鉄馬邸〉を久しぶりに訪れるにあたり、確かめたかったことがふたつある。ひとつは、今は後の塗装の下に隠れているが、世界初期のコンクリート表現（打放し、研磨）について。もうひとつは、正面に突き出す回り階段について。

まず打放し技術について。ポイントは型枠と、その左右の型枠を一定の隙間をあけて宙に浮くようにして支持するセパレーター^{セパレーター}のふたつ。型枠は、幅2尺ほど、長さ1間ほどを基本とし、堰板^{せきいた}にはおそらく杉の幅3寸ほどが使われている。堰板に回り縁はないから、戦後に一般化するように量産化した型枠を現場に合わせて組み合わせたのではなく、現場に合わせて型枠をつくっている。

1階ごとに打ち継ぐときに生じる「打ち継ぎ目地」はない。レーモンド事務所での建設に参加した杉山雅則さんに聞くと、「レーモンドの机の上にはペレの仕事の雑誌や本が山積みされており、しょっちゅう見返して参考にした」ということだった。なぜしょっちゅう見返したか疑問だったが、型枠をどんな寸法でつくり、どうセパレートするかなどの細かい要点を写真や図面から見抜こうとしたのだろう。

セパレーターに型枠をどう固定したかは、固定の跡（今なら丸い凹み）がなく、謎。ホント、

どうやったんだろう。

扉も打放しでつくられているが、こっちの外側の型枠は本体とも庭側とも違い、定尺で量産した型枠を使っている。幅1尺ほどで、枠がまわり、堰板の幅は短い。扉も後にモルタルか何か塗られているが打ち放したときの状態はよくわかり、堰板同士の目地からノロは出ていないということは、堰板と堰板のつなぎには建築本体と違い「実^{まこと}」が入っていることになる。戦後の日本の打放しの秘術ともいべき実入り目地がいつ始まるのかは謎だったが、この扉からかもしれない。定尺の型枠もこの扉が起源か。

続

いて、正面に突き出す回り階段の不可解について。なぜ、門から建物にアプローチすると、まず回り階段がドンと突き出して迎えるのか。回り階段の脇から地味な表現の玄関に入ることになる。レーモンド自邸でもこんな奇妙な人の迎え方はしていなかった。このたび、ゆっくりじっくり見せてもらい、わかった。自分の影響を受けてコンクリート表現を開始したコルビュジエにライバル心を燃やすレーモンドにとって、正面に突き出す回り階段の外壁こそ勝負所だったにちがいない。

スイス学生会館は直線と平面を旨とするモダニズム陣営のなかで曲面を初めて使うことで世



現代住宅 併走 Antonin Raymond × Fujimori Terunobu

6

主室(リビング・ダイニング)は、丸柱で支えられ庭に続く左手の窓は横長連続窓。梁が隠されている点に注目。全体にコルビュジエの影響が強い。

界の若手、たとえば日本の丹下健三に強い印象を与えるが、しかし、その曲面は石(大理石と自然の割石)で仕上げられ、打放しは1階のピロティに限られていた。先行するペレの教会は、打放しを柱で使っていた。そこ

でレーモンドは、ペレもコルビュジエもやったことのない、面のコンクリート表現、それも曲面の研磨仕上げによってコンクリートも高級感をもちうることを強調しようと考えたのではあるまいか。



7

塀も打放し。後に薄くモルタルを塗っているが、当時の技術をうかがうことができる。

8

2階の書斎の暖炉。右手の棚の向こうの壁には丸いポチ窓があく。コルビュジエにはないレーモンドならではの材料とディテールの充実に注目。

9

2階子ども部屋。



回り階段の打放しの製図と施工の難しさはその筋ではよく知られ、コンピュータのない当時、製図ができたのは図学に長けた杉山さんだけだったと、一緒に働いた崎谷小三郎さんが言っていた。

長大な住宅平面を真ん中で少し折って打放しの面を形づくり、その端部に強い印象の研磨による回り階段を据え、そこを正面アプローチとする。面の打放し、これがテーマだった。

赤星鉄馬邸



外観。ライトの影響とみていいのではないか。

建築概要

所在地	東京都武蔵野市
主要用途	住宅
設計	アントニン・レーモンド
敷地面積	約4,500㎡
建築面積	約360㎡
延床面積	約610㎡
階数	地上3階
構造	鉄筋コンクリート造
竣工年	1934年
図面提供	株レーモンド設計事務所

アントニン・レーモンド

1888年オーストリア領ボヘミア地方（現チェコ共和国）に生まれ、プラグ工科大学（現チェコ工科大学）に学び、アメリカに渡る。フランク・ロイド・ライトとともに帝国ホテル建築のため来日し、1923年独立。そのもとから前川國男、吉村順三などが育ち、日本の20世紀後半の建築界をリードする一大人脈を形成した。世界的にみると、オーギュスト・ペレに続いて打放しコンクリート表現をリードし、コルビュジエもこと打放しについてはレーモンドをパクったと私はらんでいる。76年逝去。

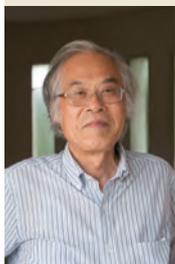


株レーモンド設計事務所提供

Antonin Raymond

藤森照信

建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞=「明治の東京計画」（岩波書店）で毎日出版文化賞、「建築探偵の冒険東京篇」（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞。



Fujimori Terunobu

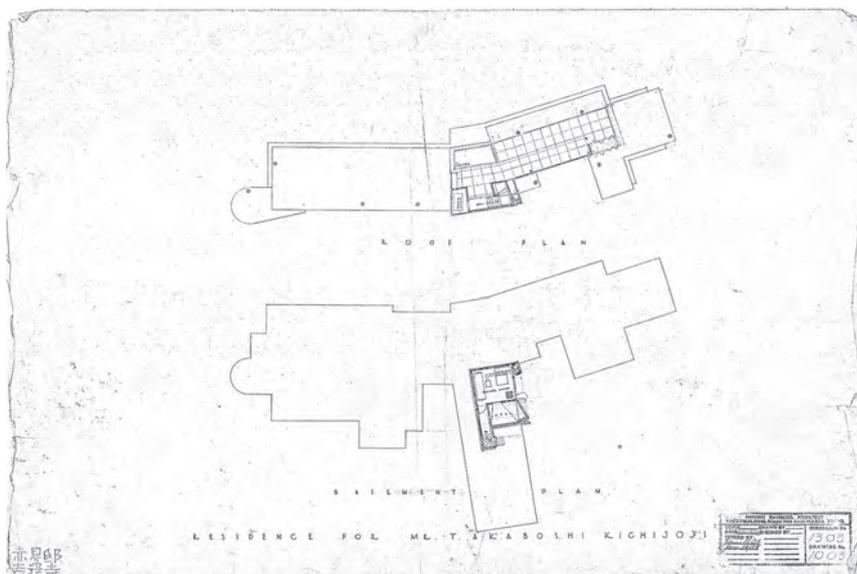
平面図

0 5 10m

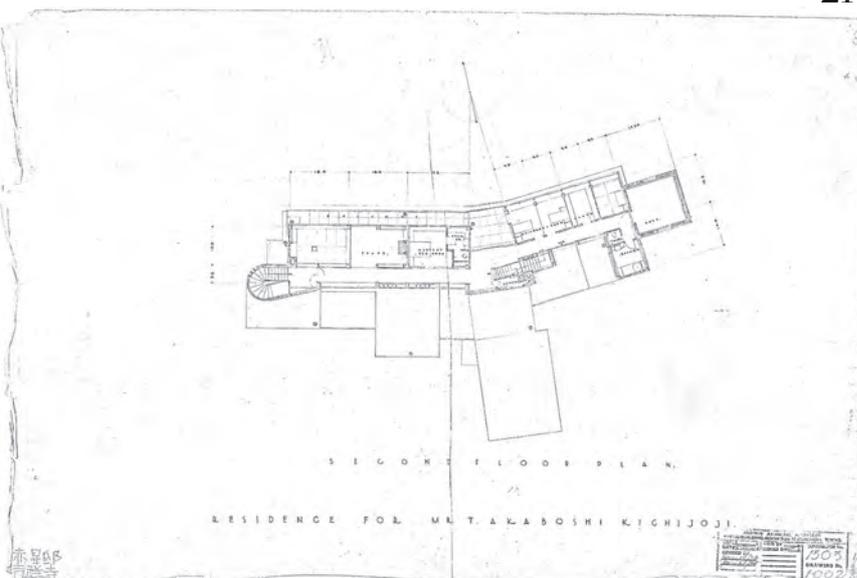
1/700



3F



2F



1F





地域のシンボルとなった公共トイレたち

取材／文／大山直美 写真／大木大輔(ポットトイレを除く)

project “THE TOKYO TOILET”

渋谷区の17カ所のトイレが、建築家たちの手で生まれ変わった。

東京・渋谷区内に有名建築家やデザイナーが手がけた公共トイレが次々に誕生し、話題を呼んでいる。坂茂さんのデザインによる透明なトイレをご記憶の方も多いだろう。これは日本財団が渋谷区の協力を得て、暗い・汚い・臭い・怖いといったイメージ

きら星のごとき面々。建築家だけでなくプロダクトやグラフィックなど、ジャンルを超えたデザイナーが交じっているのも興味深い。設計施工には大和ハウス工業、トイレの現状調査や設置機器・レイアウトの提案にはOTTOが協力している。

誰かが快適に使えるものに変えるべく進行中のプロジェクト「THE TOKYO TOILET」の一環。2021年夏までに区内17カ所のトイレが一新される予定だ。参加クリエイターは安藤忠雄、伊東豊雄、後智仁、片山正通、隈研吾、小林純子、坂倉竹之助、佐藤可士和、佐藤カズー、田村奈穂、NINGO®、マーク・ニューソン、坂茂、藤本壮介、マイルス・ペニンソン、横文彦の16名という、

日本財団はポットトイレの売り上げをおもな財源とする民間の助成財団だが、同プロジェクトマネジャーの花岡隼人さんによれば、近年は海洋船舶関連事業だけでなく、子どもや高齢者・障害者の支援など、幅広い分野で活動しており、今回のプロジェクトのように、あらゆる人や組織をつなぐ「ソーシャルイノベーションのハブ」となることを目指しているという。

て研究を重ねてきた経緯もあり、トイレは財団にとって重要なテーマのひとつだった。渋谷区とは2017年に包括連携協定を結んでいたことから、区内の公共トイレの改修計画が持ち上がり、公園や幹線道路沿いなど、もともと公共トイレがあった17カ所を選定。実質は改修ではなく建て替えであり、2020年に予定されていた世界的なスポーツ大会を見据えた計画であることは言うまでもない。

財団から各クリエイターに伝えたい要望は、東京都の条例や渋谷区の規制などのルールに従うこと、OTTOのアドバイスをしっかり聞き入れること、そして性別や年齢や障害を問わず使える「だれでもトイレ」を最低ひとつ設けることの3点。全トイレ共通のオリジナルのピクトサインは佐藤可士和さんがデザインした。

公共トイレが街を変えていく

今回、すでに完成済みのトイレのうち、4つのトイレを取材した。

インの「恵比寿東公園」のトイレを訪ねた。タコの滑り台が目目を引く緑豊かな児童遊園の一角にたたずむのは、真っ白な美しい建築。中庭を中心に分棟配置された男性用、女性用、多機能トイレの各ブースをカーブした軽やかな屋根が特徴。屋根と壁のあいだにはすりガラスのハイスライドライトが設けられ、内部にはやわらかな外光が差し込んでいる。休憩もできる公園内のパビリオンや、子どものための遊具のようなトイレを目指したという。「タコ公園」と呼ばれる恵比寿東公園に、新しく生まれた『イカのトイレ』として親しまれることを望んでいます」という、横さんのコメントが微笑ましい。

「トイレだけ少し遊べる遊具のような意識でデザインされていて、すごくユーモアのある発想に感じました。普段もつとスケールの大きなものをつくっている方々がこんな小さな建築をどう表現するのかわかりませんでした。みなさん、遊び心が豊かなんですよ」と花岡さん。次に、安藤忠雄さんが手がけた「神宮通公園」のトイレは、円筒の上に大きく張り出した屋

Area 3

東三丁目公衆トイレ



赤い折形でつくられたようなデザイン。

Area 1

恵比寿東公園トイレ



白を基調とした清潔感のあるデザイン。

Area 2

神宮通公園トイレ



雨宿りできそうな深い軒下空間がある。

Area 4

西原一丁目公園トイレ



すべて「だれでもトイレ」の広々としたトイレ。



THE TOKYO TOILET Area
1

多機能トイレ

視線をコントロールしながら、多機能、女子、男子のトイレを分散配置。



女子トイレ

ハイサイドライトから自然光が差し込む明るい空間になっている。



夕景

夜は室内の光が外にもれ、建物周囲の安全にも配慮している。

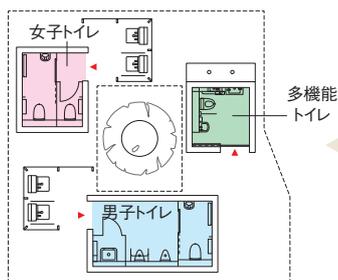


男子トイレ

屋根とガラスのあいだの開口により、自然通風と自然換気を促している。

平面図

0 1 2m
1/270



おもなTOTO使用機器

恵比寿東公園トイレ

壁掛大便器セット・フラッシュタンク式/UAXC3CS1

ウォシュレット アプリコットP(温風乾燥付きエコリモコン)

/TCF5840AUPR

マイクロ波センサー壁掛小便器セット/XPU21A

コンパクト多機能トイレパック/UADAK21RIA1ASN2WA



▲ 男子トイレ
円弧状の動線沿いに便器や洗面台などが配置されている。



▲ 外観
円筒の外観。ルーバー状の外壁がまわりを囲んでいる。

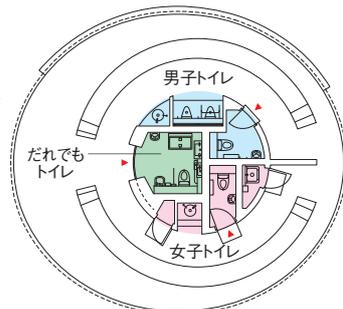
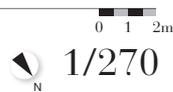


▲ 女子トイレ
トップライトからの光が室内を明るくしている。



▲ だれでもトイレ
入り口の正面にあり、男子、女子ともに入りやすい配置。

平面図



おもなTOTO使用機器

神宮通公園トイレ

壁掛大便器セット・フラッシュタンク式/UAXC3CS1
ウォシュレット アプリコットP(温風乾燥付きエコリモコン)
/TCF5840AUPR
マイクロ波センサー壁掛小便器セット/XPU21A
コンパクト多機能トイレパック/UADAK21L1A1ASN2WA

東三丁目公衆トイレ

夕景

折形をモチーフとしているため、壁や屋根などが薄くつくられている。



THE TOKYO TOILET
Area

3

女子トイレ



「THE TOKYO TOILET」で統一して用いられたピクトサイン。

多機能トイレ



狭小の公衆トイレにおいても、広さが確保されている。

洗面台



洗面台や個室も、三角形の平面の中に収められている。

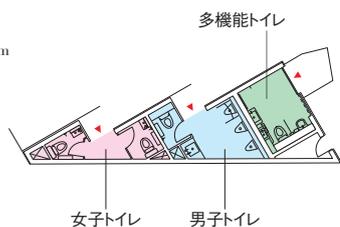
男子トイレ



小さな三角形の平面の中に収められた小便器。

平面図

0 1 2m
N 1/270



おもなTOTO使用機器

東三丁目公衆トイレ

壁掛大便器セット・フラッシュタンク式/UAXC3CS1

パブリックコンパクト便器・フラッシュタンク式/CFS497BC

マイクロ波センサー壁掛小便器セット/XPU21A

コンパクト多機能トイレパック/UADAK21RIA1ASN2WA



THE
TOKYO
TOILET

4

だれでもトイレ

大きな半透明の壁面には、樹木の絵が描かれている。

夕景

周囲の治安向上のために、行灯のように光る外観。

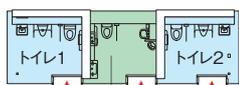
トイレ2

半透明の壁面から光を取り込んでいる。周囲の緑の影が落ちている。



平面図

0 1 2m
N 1/270



だれでもトイレ

おもなTOTO使用機器

西原一丁目公園トイレ

壁掛大便器セット・フラッシュタンク式／UAXC3CS1

ウォシュレット アプリコットP (温風乾燥付きエコリモコン)

／TCF5840AUPR

マイクロ波センサー壁掛小便器セット／XPU21A

コンパクトオストメイトバック／UAS81RSB2NW#NW1

根がかかるユニークな形。外壁は光や風が通るスリット状にし、迫り出した庇の下は人々が雨宿りする場にもなるように考えたという。

花岡さんいわく、「以前のトイレはホームレスが住み着いたり落書きがあつたりとひどい状態だったんです。安藤さんも横さんも公共トイレの安全対策を非常に重視されていて、こちらがお願いするまでもなく、最初から2方向に抜かれるプランをご提案くださいました」。

また、ここで苦労したのは建物の配置決め。公園の地下には下水管などの設備があちこち埋まっているうえ、園内の桜の木の枝をできるだけ切らないでほしいという地域住民の強い要望があつたため、それら避けながら、トイレの位置を慎重に定めたそうだ。

一方、「東三丁目公衆トイレ」をデザインしたのは、ニューヨークを拠点に活動中のプロダクトデザイナー・田村奈穂さん。目の前に車道、背後の擁壁の上を山手線が走る細長い三角形の敷地に、鮮やかな赤のシャープなトイレがお目見えした。国際都市渋谷を訪れるビジターへのもてなしの気持ちを含め、日本の贈り物文化の象徴である「折形」をモチーフにしたデザインだ。また、トイレには珍しい赤について、田村さんは「赤はここにトイレがあることが明確に

伝わる色、また、緊急時に使われるアラート色で、心理的に緊張感をもたせる色です。少しでも出来心で犯罪が起こることがないように、そんな想いから選びました」と語る。

花岡さんによると、狭小変形地に各ブラスや機器類をうまく納めるのが大変で、最後は現場でペーパーホルダーの位置を微調整するなどして対応したとのこと。さらに、コロナ禍で田村さんが来目できなくなつたため、トイレ内にノートパソコンを持ち込み、竣工確認をリモートで行つたという。

最後に、坂倉竹之助さんがデザインした「西原一丁目公園トイレ」を取材した。ここは甲州街道のすぐ裏手の緑道沿いに延びた公園の一角にあり、周辺は住宅街。以前は汚いだけでなく真つ暗で、近寄りたがたい雰囲気だったそうだ。現地を見た坂倉さんは「明るく開放的で、誰もが快適に、平等に使える、『利用したいと思う』トイレを創出すること、またトイレ単体ではなく、この公園全体のイメージを改善することを目指しました」と語る。

導き出したイメージは「行燈」。実際に訪れると、まさに行燈のような半透明のシンプルな箱の内部は、昼はやわらかな光で満たされ、明るく開放的な印象。夜は全体が発光し、きつと街の治安にも貢献するにちがいない。

THE TOKYO TOILET

建築概要

恵比寿東公園トイレ

所在地	東京都渋谷区恵比寿1-2-16
施主	日本財団
デザイン	横 文彦
設計施工	大和ハウス工業
建築面積	48.80㎡
延床面積	42.85㎡
構造・階数	鉄骨造、鉄筋コンクリート造・地上1階
竣工	2020年8月

神宮通公園トイレ

所在地	東京都渋谷区神宮前6-22-8
施主	日本財団
デザイン	安藤忠雄
設計施工	大和ハウス工業
建築面積	62.80㎡
延床面積	54.47㎡
構造・階数	鉄筋コンクリート造、鉄骨造・地上1階
竣工	2020年9月

東三丁目公衆トイレ

所在地	東京都渋谷区東3-27-1
施主	日本財団
デザイン	田村奈穂
設計施工	大和ハウス工業
建築面積	19.25㎡
延床面積	18.84㎡
構造・階数	鉄筋コンクリート造・地上1階
竣工	2020年8月

西原一丁目公園トイレ

所在地	東京都渋谷区西原1-29-1
施主	日本財団
デザイン	坂倉竹之助
設計施工	大和ハウス工業
建築面積	21.45㎡
延床面積	21.45㎡
構造・階数	鉄筋コンクリート造・地上1階
竣工	2020年8月

本誌掲載以外の、THE TOKYO TOILETの事例を建築専門家のための情報サイトCOM-ET(コメント)にてご紹介しております。 → <https://jp.toto.com/com-et/tc/tips/J001.htm>



日本財団
経営企画広報部
ソーシャル
イノベーション
推進チーム
チームリーダー

花岡隼人
Hanaoka Hayato

よく見ると、トイレ単体だけでなく周辺の植栽など、外部空間も一体でデザインされており、設計者の想いが伝わってくるようだ。ここは3つのブラスがすべて「だれでもトイレ」仕様で、並んだ3つのトイレの扉に描かれた男女のピクトサインを見ると、LGBTQ+といった性別への配慮もここまでできたかと実感させられる。

1日3回も清掃を行う

ところで、今回のプロジェクトで見逃せないのは、単にデザイン性の高いトイレをつくるだけでなく、維持管理に対する取り組みも周到である点だ。日本財団は渋谷区、一般財団法人渋谷区観光協会と手を組み、3年間費用を負担し、一般的な公共トイレより多い1日3回の清掃を行い、トイレ診断士によるチェックを受け、定期的に協議会も開いてメンテナンスを向上させていくという。ファッションデザイナーのNINGO®さんが

監修したオリジナルデザインの清掃員用ユニフォームも用意した。「テーマパークの清掃スタッフのように、みなさんを喜ばせるキャストという意識で従事していただければという想いでつくりました」と花岡さん。

ちょうど横さんデザインのトイレを取材した際、清掃中だったが、通常の公共トイレでは見かけない若い女性スタッフがユニフォームに身を包み、はつらつと働いている様子は新鮮だった。細かいチェック項目を設定し、一つひとつ達成していくことで、モチベーションやスキルも上がっていくという。

名だたる建築家やデザイナーがこぞって、トイレを小さな公共建築ととらえて全力投球した今回の贅沢なプロジェクト。これまで地域住民にとっては迷惑施設でしかなかった公共トイレが、街の自慢のシンボルとなってくればうれしいと花岡さんは語る。渋谷区だけにとどまらず、全国の公共トイレを向上させるきっかけになることを願いたい。

新商品

開発
物語



New
Product
Story

Interview
with
Kimura Tomoyuki
and
Yoshida Rumi

「住宅用壁掛トイレFD（フローテイング・デザイン）」

わが家のトイレは、

宙に浮く

壁掛けトイレ。

住宅用トイレの常識が変わります。

壁掛けトイレは、便器の下が

空きスペースになるため、

ワイパーで床の奥まで

全面拭き掃除ができる、

とても便利な商品です。

それが、今家庭用トイレとして

コンパクトなサイズになって、

初登場。その魅力と、

開発にまつわるエピソードを

担当のふたりがご紹介します。

取材／村上浩平 写真／山内秀鬼

お掃除が画期的に ラクになる、 壁掛けトイレ

——壁掛けトイレとはどういうものですか。

木村 今日本の家庭にある洋式トイレは、ほとんどが床に据え付ける床置き型のもので。いっぽう壁掛けトイレは、便器が床ではなく、後ろの壁に固

定してあるもの。その最大のメリットは、便器の下が空きスペースになっているため、お掃除がとてラクだということです。

吉田 お客さまにトイレに関するヒアリングを行うと、清潔さに一番の関心が集まります。なかでも便器と床の境の汚れが気になるという声が多かったです。これなら便器の下が何も無い空間なので、床用のワイパーが奥まで

とどいて、簡単にお掃除できます。

木村 欧米では一般的ですが、日本でも最近では高速道路のサービスエリアや駅舎のトイレに積極的に採用されています。やはりパブリックな場所ではつねに清潔を保つことが求められますからだと思います。

——なぜ日本の住宅では普及してこなかったんでしょう。

木村 壁掛け型は、陶器製の便器とそ

こに座る人間の重さを下ではなく、横から支えることになります。そうすると、通常の木造住宅の壁だと耐えきれないですね。たとえばヨーロッパの住宅や日本の公共建築などのコンクリートの壁でしたら、何百キロという力を伝えても心配ありません。しかし木造住宅だと、特別な仕様でない限り、やはり無理がありました。

——TOTOのラインアップには、以

TOTO株式会社
トイレ空間生産本部
トイレ空間開発部
トイレ空間住宅
商品開発グループ

木村知之

Kimura Tomoyuki

きむら・ともゆき／1993年にTOTOに入社。衛陶生産本部の開発にて小便器の開発に従事。2017年からトイレ空間生産本部。19年から今回の新商品の企画立案などを推進。

荷重をかけても大丈夫です

TOTO株式会社
デザイン本部
デザイン第二部
第二デザイングループ

吉田瑠美

Yoshida Rumi

よしだ・るみ／2012年にTOTO入社。デザイン本部にてシステムバス、システムキッチンでのデザインに従事。2017年度よりトイレ空間のデザインを推進。

Interview with Kimura Tomoyuki and Yoshida Rumi

前から住宅用の壁掛けトイレはありましたが、
したよね。

木村 はい。しかし荷重を支えるため、背後に大型キャビネットを備えるシステムトイレというかたちをとらざるをえません。そうすると広いスペースが必要になり、どこの家庭にでも設置できるというわけにはいかなかったんです。

ふつうの住宅に設置できる

「住宅用壁掛トイレFD」

——ということは、今度の新商品は違うんですね。

木村 「住宅用壁掛トイレFD」は、標準的な木造住宅なら、新築はいうまでもなく、リモデルでもお選びいただけるようになった画期的な商品です。

——これまで使っていた床置き型のものから、清掃性のいい壁掛けトイレに替えられると。

木村 そういうことです。便器先端から後ろのキャビネットまでふくめて760mmと、床置き型の普及モデルとほぼ同じ奥行きです。キャビネットの幅も430mmですから、今お使いのトイレとほぼ同じスペースにすっぽり入れられるというわけです。

吉田 キャビネットの内部には、給水タンクだけでなく、ホコリのたまりやすい止水栓やコンセント、洗浄レバーまで収まっており、便器裏も隠蔽されているので外観はすっきり。お掃除もさらにスムーズになりました。

便器が

インテリアの 一部となった

——便利だけでなくデザイン的にも
すっきりしましたね。

吉田 キャビネットは幅も奥行きも極
限まで小さくしています。また床置き
型の便器に比べ、便器が床から浮いて
いるので軽やかで浮遊感があり、空間
がすっきり、広く感じられるんです。

——なるほど。

吉田 これだけシンプルだと、お客さ
まのどんなインテリアにも溶け込みや
すいです。キャビネットの上は飾りを
置くスペースにもなります。家にゲス
トをお呼びしたとき、トイレだけはほ
ぼ必ずお連れしますよね。ちょっとし
たおもてなしをしたい場所ですし、最
近は自分らしく飾ったトイレをSNS
に載せる方も多く、居室の一部になっ
てきています。キャビネットは2色、
天板も、手洗い器とセットで5種類の
ものを用意して、インテリア性を高め
ました。

——足元照明もムードがありますね。

木村 壁掛け型は、足元照明を入れる
ことで浮遊感がうまく演出できるん
ですね。間接照明という意味でも効果的
です。

吉田 また、夜中トイレに行くと、照
明が目が覚めてしまうというお子さま
やシニアの方もいらっしゃるそうです。
FDなら、入室すると自動でこれだけ

が点灯するので、まぶしくないし、足
元も安心です。

——壁掛けにしかできない効果ですね。

吉田 お母さんたちからは、子どもが
こわがらないとか、楽しい場所になる
というコメントもいただきました。

面材を

使った、

ざん新な構造

——ところで、どうやって壁掛けトイ
レを床置き型のサイズにできたので
すか。

木村 そのためには、便器と付属物を
そのサイズに収めること、そして荷重
を支えるための構造が必要です。人が
座る便器そのものは変えられないので、
スペースを小さくするには後ろのキャ
ビネットを削るしかありません。スリ
ム化したうえで、従来その中であつた
荷重を支える仕組みを根本から考え直
さざるをえませんでした。

——そうでしょうか。

木村 システムトイレの場合は、左右
の隅柱にフレームを取り付けています。
フレームを受木に固定して、荷重を直
接隅柱に逃がすわけですね。そしてそ
のフレームを間口いっぱい収納キャ
ビネットで覆う。しかし、FDはキャ
ビネットを小さくするため、隅柱に頼
らないスタンドアローンの形態が必要
でした。そうすると真後ろで荷重を支
えなければなりません。
——横ではなく真後ろで支えるんです

Interview with Kimura Tomoyuki and Yoshida Rumi

ね。

木村 木材の壁に荷重をかけると、当
然内側にたわみます。そこでリモデル
の場合は後ろ壁に筋かいなどがあるか
を確認せずとも、補強材をはめ込むこ
とで簡単に対応できるようにしました。
ちよつとだけ壁の厚みが増す感じです
ね。その面材と便器やタンクなどを組
み込むフレームを一体化させて、荷重
を受け止めるかたちにしたんです。シ
ステムトイレが受木から隅柱に荷重を
逃がすのに対して、こちらは面全体に
逃がすということです。

——壁面全体で支えるわけですね。

木村 強度にはいろいろなパラメータ
がかかわるので、現物の部材での実験
や3D解析などを駆使して、大変な苦
労を重ねました。そうしてようやくこ
の36mmという面材にたどりついたん
です。仕様や強度の関係もあつて、あく
まで木造戸建て住宅で、トイレの間口
750×960mmという制限を設けさ
せていただいています。

コンパクトななか

きめ細かい

配慮

——コンパクト化も大仕事でしたね。

木村 奥行き760mmを実現するため、
キャビネットを薄くしたのですが、ほ
ぼ給水タンクのサイズそのままの奥行
きになっています。

吉田 高さも圧迫感のない750mmに
収めてもらいました。手洗い器カウ

ターの高さに統一したんですが、無理
なく、手洗いや、物を置く動作ができ
る人間にとって自然な高さなんです
木村 その分、構造計算がさらに大変
になりました(笑)。幅は当初、470
mmなら入るけど、430mmにするん
だったら、コンセントや止水栓は外に出
ますよと言ったんです。でもデザイン
チームがつくったモデルを見たら、4
30mmに全部収めたほうが、すごくシ
ンプルできれいで、お客さまが喜ぶの
は絶対こつちだね、ということになり
ました。

吉田 角にはアールをつけて、安全性
にも配慮しています。

木村 隙間調整や長さ調整がないので、
施工もとても簡単です。

——コストダウンにも取り組んでいま
すか。

木村 コストダウンのために、給水タ
ンク、パイプなどの部材をほかの製品
と共通化しました。既製部品を使うこ
とにはコストダウンだけでなく、補修
・交換が簡単にできるというメリット
もあります。

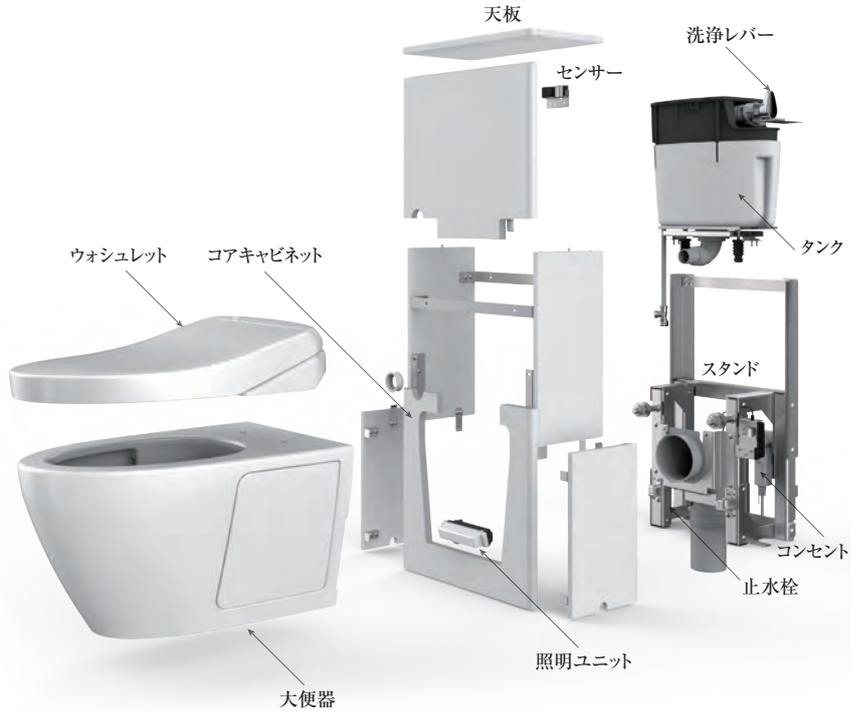
吉田 商品価格も、以前は床置き型の
ハイクラス商品よりも高価格でしたが、
床置き型と変わらないレベルに収まり
ました。

木村 細かい配慮も重ねているので、
選んだお客さまにはきつとお喜びいた
だけるはずですよ。

吉田 壁掛トイレFD、ぜひ比べてみ
てくださいね。

分解図

便器の後ろのキャビネットの中に、収められているさまざまな機器。



従来のトイレ



洗浄レバーやコンセントなどが露出している。



住宅用壁掛トイレFD



洗浄レバーなどをキャビネットに収めることにより、すっきりとしたデザインに。



おすすめプラン

住宅壁掛 トイレFD

¥334,400

(税・工事費別)
品番/UWEDABKBA

カタログのご請求

詳細はカタログ「レストルームカタログ」(カタログNO.1401)をご覧ください。カタログをご希望の方は、本誌に同封の「TOTO通信2021年新春号アンケート用紙」にご記入のうえ、ファクスまたはWEBにてお申し込みください。

ファクス



093-571-0999



カタログを
ご覧いただけます

お問い合わせ

商品の技術的なご質問は、技術相談室ナビダイヤルまでお問い合わせください。

ナビダイヤル

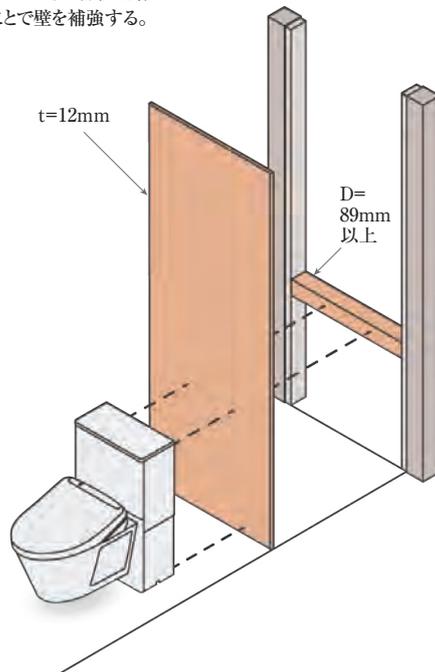


0570-01-1010

壁掛けトイレを設置する際の壁補強

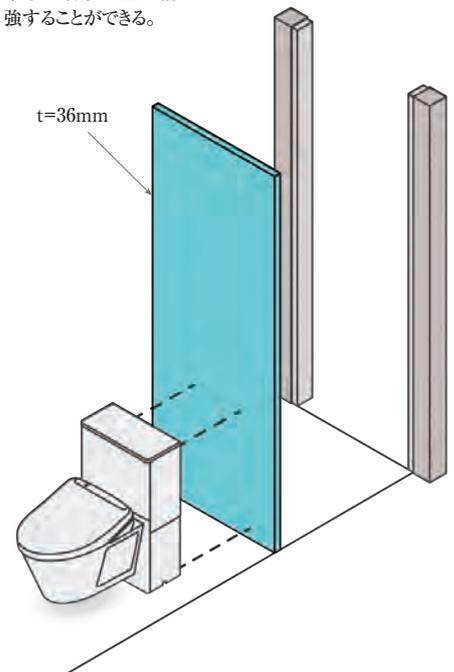
新築の場合

柱のあいだに横桟をつけるとともに合板を貼ることで壁を補強する。



リモデルの場合

工事数を減らすため、厚手の合板で壁を補強することができる。



JOY in Architecture

建築家の登竜門とされるJIA新人賞、吉岡賞、住宅建築賞金賞など数々の賞を受賞し、エネルギーに活躍の場を広げている若手建築家・中川エリカ氏。
会場では、初期から近作におけるさまざまなスケールの模型を一挙に公開し、中川氏が考える建築の「よろこび(JOY)」を躍動感いっぱいに表示いたします。
周辺環境や人間の営みを巻き込んだ「建築の組み立て方・フレーム」を探求する姿勢と本展覧会を「建築そのもの」として表現する中川氏の挑戦をご覧ください。

JOY in Architecture

文／中川エリカ(建築家)

私は建築を考えたとき、どんなカタチが良いか、と同時に、そのカタチがどんな使い方を生み出すのか、身体にどんな感覚をもたらすのか、ということとを大事にしています。また、どの街にもそこにしかない雰囲気や体験が必ず存在し、代えがたい

価値をもっていると思うからこそ、建築が周辺環境とどのように補い合うことができるのか、ということも大事にしています。建築よりも小さなものと大きなもの、言葉にさえないものを建築と同時に検討していくためには、身体性をもった巨大で具体的で詳細な模型が必要なのです。

常日頃、スケールの異なる複数の模型をつくっているのですが、精一杯の、がむしゃらで向こう見ずなエネルギーでつくり続けていると、建築におけるよろこびをいくらでも見出すことができます。模型から建築を生み出すことが楽しくてしょうがないというよろこびもあれば、人びとの暮らしや営みには生きた発見がまだこんなにもあるのかというよろこびもあります。よろこ

びは、街や身体を通じて多様な意味や背景をもって現れるから、言葉にした瞬間、大事な何かが失われてしまうような気がして、その全てを簡単に言葉にすることはできません。だから、いつも、まだ言葉にさえてできないものへ向かって、模型を通じた建築スタディをしているのだとも言えます。模型にすることで、はじめて、おもしろいと感じかされることこそ、私の建築にと



模型群

©yujiharada

限りのスタディやリサーチの実践が一堂に会しています。現代の建築において、建築を表現する方法にルールや様式はなく、何を表現して何を表現するかというジャッジ自体が建築家の思想であり創造性の記述なのだろうと思います。ゆえに、物質を組み立て建築家の思想を表現するという意味で、本展覧会は、展示のためではなく、建築そのものとしてつくられた展覧会です。

まだ見ぬ建築のために、必要不可欠だと感じて、地球の裏側、南米チリまで事務所全員でリサーチにも行きました。リサーチでは約400のパブリックファニチャーを中心とした野外什器を記録し、屋外での居場所のつくり方、什器の組み立て方、そこに現れる人間それぞれの気質、街への態度の示し方などを学びました。おもしろいと思うことは、

つての重要なエッセンスとなっていてます。模型という具体的な物質を、身体を通じてさらに翻訳し、建築という次の新しい具体的な物質を生み出すというスタディ、その経験を繰り返すなか、理論書によって考え方を示す方法もあれば、スタディの方法によって考え方を示す方法もあるのではないかと実感するようになりました。

この展覧会では、現時点で思いつく

いつものように、具体的に詳細な模型にすることで、リサーチで得た発見や体験をそのままこれからの設計へ連続させていこうとする挑戦も会場にあります。多様な批評を巻き起こす建築展覧会となるよう、準備を進めています。建築を通じてまだ見ぬよろこびをたくさん分かち合うことができるなら、これに勝るしあわせはありません。

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

次回 予告

2021年度の
展覧会・講演会については
未定です。

開催日時が決まり次第、
TOTOギャラリー・間ウェブサイト
(<https://jp.toto.com/gallerma>)
でご案内いたします。

TOTOギャラリー・間



所在地

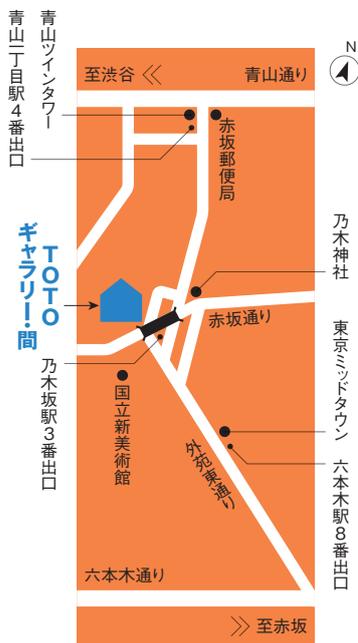
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話/03(3402)1010
ファクス/03(3423)4085
開館時間/11:00~18:00
休館日/月曜日・祝日、
夏期休暇、年末年始、展示替え期間
入場料/無料 事前予約制(*)
アクセス

- 東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
- 東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分
- 東京メトロ銀座線・半蔵門線、
都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

<https://jp.toto.com/gallerma>

*事前予約はTOTOギャラリー・間ウェブ
サイトよりお願いいたします。

※新型コロナウイルス感染防止策につ
いては、ご来場の際にTOTOギャラ
リー・間ウェブサイトをご参照ください。



展覧会会期/2021年1月21日(木)~3月21日(日)

中川エリカ

Erika Nakagawa



©yujiharada

なかがわ・えりか/1983年東京都生まれ。2005年横浜国立大学卒業。07年東京藝術大学大学院修了。07~14年オンデザイン勤務。14年中川エリカ建築設計事務所設立。14~16年横浜国立大学大学院(Y-GSA)助手。おもな作品に「ヨコハマアパートメント」(2009、西田司/オンデザインと共同設計)、「桃山ハウス」(2016)など。おもな受賞に、JIA新人賞(2011)、住宅建築賞金賞(2017)、第34回吉岡賞(2018)など。

News File(55ページ)にて展覧会とあわせて発行の書籍「中川エリカ 建築スタディ集 2007-2020」を紹介しておりますので、あわせてご覧ください。



丘端の家

©yujiharada



A Study of a Neighborhood
in Tokyo, Japan

©yujiharada



桃山ハウス

©Koichi Torimura



SKIP ROOF

©yujiharada

TOTO GALLERY MA

News **3**

国際環境賞 GREEN GOOD DESIGN AWARDS 2020 受賞

自動洗浄小便器(壁掛型)が、環境配慮に優れたデザインと先進的な技術を有する製品に与えられる世界的な賞「GREEN GOOD DESIGN AWARDS 2020」を受賞しました。当賞の受賞は2015年、2016年、2018年に続き4回目、計5商品目となります。今回受賞した自動洗浄小便器(壁掛型)は、洗練された快適な空間設計とアプローチしやすいデザイン、加えて超節水と衛生性を両立するとともに、“サステナブルな社会を

実現し、世界のパブリックトイレを牽引する商品”として、ものづくりに取り組むTOTOの姿勢が、高く評価されました。



マイクロ波センサー壁掛け小便器セット「RESTROOM ITEM 01」XP21A・XPU22A(ターゲットマークあり)

News **1**

全国発明表彰で ネオレストNXの意匠が「発明賞」を受賞しました

「ネオレストNXの意匠」が、全国発明表彰(*)において発明賞を受賞しました。TOTO商品の受賞は7度目になります。今回受賞したネオレストNXは、TOTOが世界に発信した次世代トイレとして、ウォシュレット一体形便器の構成をゼロベースで見直したグローバル統一モデルです。従来にない優美な曲線を備え、モダンな空間からクラシカルな空間までどのような環境でも調和します。オブジェのようなデザインと、人間工学に

基づき排泄しやすさを考慮した点が発賞につながりました。



ネオレストNX

*全国発明表彰は、大正8年、科学技術の向上と産業の発展に寄与することを目的に始まり、多大な功績を挙げた発明、考案、または意匠、あるいは、その優秀性から今後大きな功績を上げることが期待される発明などを表彰する制度です。

News **4**

TOTOミュージアム開館5周年 「おもてなし規格認証2020」の 「トラベラー・フレンドリー紺認証」を取得

TOTOミュージアムは2020年8月28日で開館5周年を迎えました。これまでに、福岡県内はもとより全国各地、さらには海外からも多くのお客さまにお越しいただいております。5周年の節目の

年に、経済産業省が創設した「おもてなし規格認証」において、2020年度の「トラベラー・フレンドリー紺認証」を取得しました。この認証制度は、サービス品質を「見える化」することで、日本のサービス産業の活性化などを目的としたものです。「おもてなしの心をもって世界中にTOTOファンを創出し拡大する」というTOTOミュージアムの接客理念のもと、今後もよりいっそうご満足いただけるよう取り組んでまいります。



TOTOミュージアム

News **2**

ウォシュレット(*)一体形便器 「ネオレスト」シリーズ 累計出荷台数300万台突破

ウォシュレット一体形便器「ネオレスト」シリーズが1993年4月の発売以来、累計出荷台数が300万台を突破しました。「便器でない便器を作れ」。従来の固定観念を捨てTOTOがもつ技術を結集して生まれた便器は次世代型便器「ネオレスト」と名づけられました。以来、さらなる高機能、高性能、高いデザイン性でお客さまの高水準の満足を約束し、今ではセフィオンテクト、トルネード洗浄、きれいな除菌水、エアインワンダー



一体形便器「ネオレスト」シリーズ

ウェーブが搭載されています。2017年には、これまでのネオレストを凌駕する「ネオレストNX」が生まれさらに進化を続けています。

*「ウォシュレット」はTOTOの登録商標です。

B Book

TOTO出版のお知らせ

『中川エリカ 建築スタディ集 2007-2020』

注目の若手建築家、中川エリカ氏の初の単行本。設計事務所、オンデザインでの担当作品「ヨコハマアパートメント」、独立後のデビュー作「桃山ハウス」ほか、計画中の作品を含む15のプロジェクトを掲載。スタディの目的ごとにくつも制作する大きなスケールの模型、街と建築の連続性を検証するための「街のコンテクスト図」など独自のスタディ手法を通して、中川氏の作品と思想を紹介します。建築家、西沢大良氏との対談も必読。



同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

著者	中川エリカ
定価	3,600円+税
体裁	B4判、ソフトカバー、192ページ
発行日	2021年1月

<https://jp.toto.com/publishing>

I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

2F

Bookshop
TOTO

電話/03(3402)1525
定休日/月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始
※事前予約制。詳細はBookshopTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com/bookshoptoto>)をご参照ください。

2F

TOTO出版

電話/03(3402)7138
全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

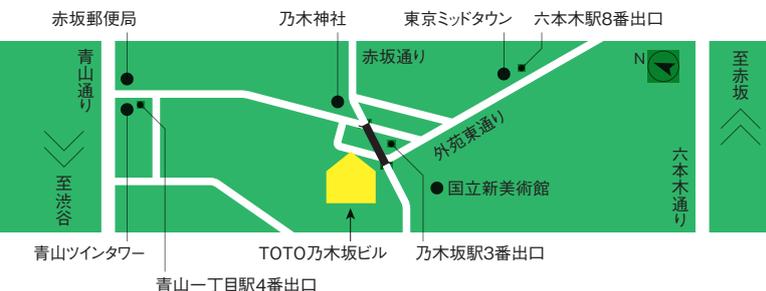
B1・1F

セラトレーディング

電話/03(3402)7134(東京ショールーム)
定休日/月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始
※日曜日は予約制

アクセス

- 東京外口千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分
- 東京外口日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分
- 東京外口銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分



N News

News 5

TOTOギャラリー・間 北九州巡回展 「中山英之展 , and then」を開催します

TOTOギャラリー・間は、北九州巡回展「中山英之展 , and then」をTOTOミュージアム(北九州市)にて開催します。会場全体をシネコンに見立て、「過去に建ち、建築家の知らない時間を過ごしてきた建物たちを映した、建築のそれから / , and thenを眺める小さな上映会」を開催。ユニークな視点に裏打ちされた、氏の「思想」と「実験」を提示します。

※新型コロナウイルス感染防止策については、ご来場の際にTOTOミュージアムウェブサイトをご参照ください。



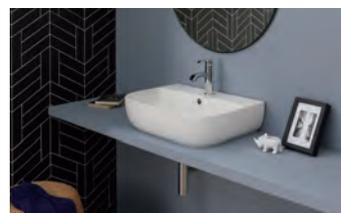
TOTOギャラリー・間
北九州巡回展
「中山英之展 , and then」
会期 2020年12月1日(火)～
2021年3月7日(日)
休館日 月曜日・年末年始
入場料 無料
会場 TOTOミュージアム
(北九州市小倉北区中島2-1-1)
<https://jp.toto.com/museum>

C Cera

セラトレーディングのお知らせ

建築専門家さま向けに セラスペシャルメンバーシップ 会員を募集中

海外の水まわり商品を取り扱うセラトレーディングならではの特典を、会員の方にお届けします。会員登録は無料です。特典1:総合カタログの定期発送(新カタログ発行時)。特典2:トレンドセミナーなど、会員限定のイベント(オンライン/オフライン)へご案内。特典3:商品情報や納入事例など水まわりコラムをメール配信。そのほか、会員限定メニューを随時拡大予定。



会員登録をご希望の方は、下記のセラトレーディングウェブサイトURL、もしくは、二次元バーコードにてお申し込みください。
<https://www.cera.co.jp/user/>





もっと自由に、もっと自分らしく。
 造作家具のようにつくれる「ドレーナ」

drena

洗面化粧台ドレーナ

TOTO技術相談室
 電話：0570-01-1010 FAX:0570-01-2111
 受付時間：〈平日〉9:00~18:00 〈土曜日〉9:00~17:00 (日・祝・夏期休暇・年末年始を除く)

建築専門家のための情報サイト
 COM・ET(コメント)
<https://www.com-et.com>

TOTOホームページ
<https://jp.toto.com>
 ※詳細はカタログまたは弊社WEBサイトをご覧ください。

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
 TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
 *当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
 関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。



この情報誌には、植物性・森林認証材など、原料と
 する環境に配慮した用紙を、さらに印刷インクも、
 環境に配慮した植物性インクを使用しています。